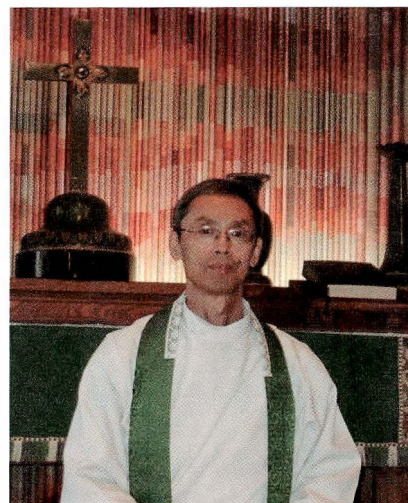


(2) 奈良基督教会の歴史と防災

日本聖公会京都教区
奈良基督教会 牧師
親愛幼稚園 園長

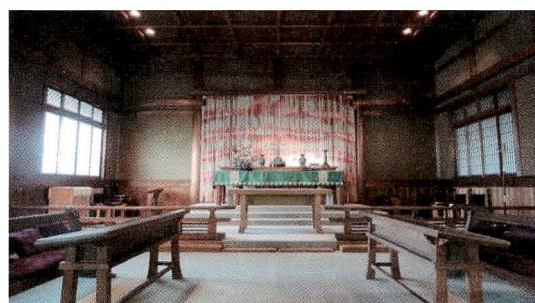
司祭 ヨハネ 井 田 泉

奈良基督教会は、英国国教会を母体として世界に広がった聖公会（アングリカン・チャーチ。約8500万人）に属する教会です。奈良では1885年に伝道が開始され、最初の礼拝堂は2年後の1887年、花芝町に建てられました。



1909年、元は興福寺の境内であった現在地を取得。3年後の1912年に現在の正門の傍らに礼拝堂を建てつつも、将来その丘の上に「大聖堂」を建設することを目指して準備を進めました。

1919年、第一次世界大戦の終息に際して、教会は「世界平和記念事業」を行い、その一環として桐の苗700本を植えました。その桐が現在の礼拝堂の欄間に用いられています。新しい礼拝堂は、最初米国人建築家が寺院風の設計試案を出したが宣教師が同意せず、次には日本人二人がゴシック様式の設計を行いました。興福寺の国宝建造物に隣接する地であり風致を損なうとの理由で奈良県社寺課の許可を得られませんでした。そこで当教会信徒であった宮大工・大木吉太郎が工夫を凝らし、純日本風木造建築とすることでようやく建設の運びとなりました。



吉野および和歌山県伊都郡富貴の立檜、樹齢130年から160年のもの計254本を購入、教会境内で製材したそうです。建築に従事した職人の多くは、その前は和歌山の日前宮の造営に当たっていた宮大工たちだったとのこと。

1928年定礎、翌年に信徒会館（現、親愛幼稚園舎）が完成、1930年に礼拝堂が完成し、聖別献堂式が行われました。

十字架がなければ寺院と見まがう造りをなしていますが、寺社建築の様式、意匠を生かしつつ、明確にキリスト教の礼拝堂として設計されたものです。例えば、伸びやかな曲線を持つ棧瓦葺屋根、小組格天井等は、まさに和風ですが礼拝堂全体はやや変形ながら十字架の形をなしています。

全体は会衆席、聖所、至聖所の三つに区切られ、また祭壇に向かう身廊（会衆席の間の中央通路）部の天上は高くして上部に高窓を設け、左右の側廊部の天井は低くされて、身廊部と側廊の間は列柱で区切られています。

これは「三廊式バシリカ型」と呼ばれる礼拝堂の形式です。

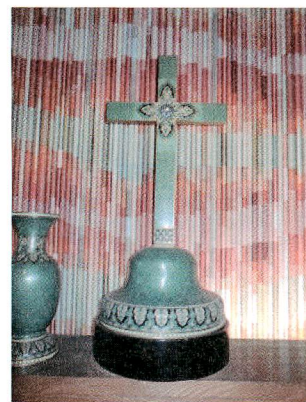


祭壇上に置かれている十字架、花瓶、燭台は礼拝堂完成と同時に設置されたものですが、これは伝統的金属工芸技法の七宝焼です。

十字架の土台の裏側には「奈良帝室博物館長監督 久保田 鼎、図案 吉田包春、製作 加藤寅次郎」と刻まれています。

しばらく前、正倉院の宝物の画集を見ていて「黄金瑠璃鈿背十二稜鏡（おうごんるりでんはいのじゅうにりょうきょう）」（銀製の宝飾鏡）に引きつけられました。これが当教会の十字架の原形に違うと感じたからです。この鏡を模して製作されたに違う十字架ですが、ただ転用したのではなく、微妙な工夫がなされ、その中央にはキリストの象徴であるギリシア文字「X」と「P」の組み合わせが刻まれています。天平文化とキリスト教が千数百年を超えて出会った美しい姿ではないでしょうか。

礼拝堂の十字架と正倉院の鏡



礼拝堂と幼稚園舎は2015年7月8日、国の重要文化財に指定されました。毎日、百数十人が集う、生きた営みの空間です。子どもも大人も、ここで大切なものと出会い、学び、成長していきます。多くの人々の祈り、嘆き、喜び、感謝がここには積み重ねられています。

目に見える建造物や備品とともに、目に見えないけれども人を受け入れ慰め生かしていく「空気」が大切に保たれていかなければなりません。そして次の50年、100年、200年へと譲り渡していく責任が私たちにはあります。

従来から幼稚園では定期的に地震防火避難訓練を行い、これに教会も参加する形をとってきましたが、文化財指定を機会にいつそうの防火防災防犯意識を高め、必要な設備を整えるとともに防火・防災の実験的経験を深めていきたいと願っています。

消防署をはじめとして各方面のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。